

持続する建築形態群としてのカルチェラタン (Quartier latin)

—旧パリ大学ソルボンヌ校舎を中心とした歴史的変遷の復元作業から—

建築史・建築論研究室 勝部 直人

序章

0-1 研究背景と本研究の視座

本研究は「大学都市」カルチェラタンの旧パリ大学ソルボンヌ校舎を中心とした建築形態群の「持続性」に着目し、その構成の特質と歴史的な形成過程を明らかにするものである。

ヨーロッパにおいて都市社会のなかで生まれた大学が集中し、学術研究の機能をもって発達した「大学都市」は、大学の自治を基本としながらも同時に教会、王権、国民国家などのイデオロギーが交錯する場であった。それらは「大学都市」の空間に地域の特性、当時の建築様式とともに反映された。

日本においてヨーロッパの「大学都市」を取り扱った研究の多くは大学史分野の業績が占められ、建築歴史・意匠分野と都市計画分野における研究は限られている。岩城の研究は中世ヨーロッパの大学が都市の広場や教師の部屋などの「場/部屋」から学寮、大学本館といった「建物」を所有し、それらが「領域」としてのキャンパスに発展する過程を整理している。また東京大学岸田研究室と多数の建築家による共同研究はヨーロッパとアメリカの大学23例を対象に「大学都市」にみられる大学建築の配置形態を類型化した。そして共同体としてまとまりを形成する「クワドラングル（中庭型の平面形式）」と「オープンスペース」の関係性に着目し、都市における大学空間の「持続性」を指摘している。

研究対象であるカルチェラタンは学寮の集積として形成された。パリにおける学寮とは12世紀以降、修道院附属学校の学生とノートルダム大聖堂付属神学校を母体としたパリ大学の学生が住まいながら学問に励む場であった。学生同士がラテン語で会話をしたことから現在のパリ5区付近はカルチェラタン(Quartier latin＝ラテン語地区)と呼ばれるようになった。

多数存在した学寮のなかでも、ソルボンヌ学寮(College de Sorbonne)が多くの知識人を輩出して著名となったため、ソルボンヌ(Sorbonne)はパリ大学そのものの代名詞となった。ソルボンヌ学寮は17世紀には王権の主導のもとで建替えられ、パリ大学ソルボンヌ校舎として本館の役割を担った。しかし19世紀初頭にはフランス革命の影響で旧体制の大学と学寮制度は全廃され、パリ大学ソルボンヌ校舎とその他の学寮は増改築を経て、高等教育機関として使用された。その後の第三共和政においては普仏戦争の敗北を契機に国民国家形成を目指し、ドイツのフンボルト主義に基づく近代大学を模範とした。パリ大学ソルボンヌ校舎は教育と研究を一体的におこない、国民に開くことを意図した結果、都市計画を踏襲した敷地拡大のための土地収用と論理的で厳粛な啓蒙的性格をもつ新古典主義様式の建築が計画された。

カルチェラタンの学寮と旧パリ大学ソルボンヌ校舎の建築群は教会、王権、国民国家のイデオロギーを反映しながら増改築が重ねられてきたが、その建築形態群は変化の継起を通じて先行形態の慎重な解釈による歴史的連続性が強い意志をもって創出されてきたと筆者は考える。この仮説を、「持続する建築形態群」と表現したい。

フランスにおいてカルチェラタンの大学関連施設を取り扱った既往研究は豊富に存在するが学寮と旧パリ大学ソルボンヌ校舎そのものの建築を対象とした研究は限られている。Aurélie Perrautの研究はパリにかつて存在していた100以上の学寮を対象に、多数の古文書に基づく検討からパリの学寮建築が修道院の中庭型の建築を模範とし、教会や王権の示したモデルを受け入れていたことを指摘している。またChristian Hottinの研究は旧パリ大学ソルボンヌ校舎を対象に、ソルボンヌ図書館に残された史料を用いてソルボンヌ学寮から旧パリ大学ソルボンヌ校舎への変遷をその社会的背景とともにまとめている。ただし両者ともに建築の専門家ではない。

既往研究にはカルチェラタンの旧パリ大学ソルボンヌ校舎を中心とした建築形態群の通史的な研究はない。カルチェラタンには多くの大学関連施設があり、膨大な史料が各機関のアーカイブに分散している。そのためカルチェラタン全体の歴史的な形成過程の把握は容易ではないが、本研究ではカルチェラタンを取り巻く、教会、王権、国民国家などのイデオロギーによる大学組織の様態に連動して形成された建築・都市空間に視野を限定し、その変容を通史的に捉えることを試みる。

0-2 研究目的

以上の背景から本研究はカルチェラタンの旧パリ大学ソルボンヌ校舎を中心とした建築形態群を対象とし、「持続性」に着眼して以下の3つを明らかにする。

- ① 12世紀から19世紀にわたる学寮の分散的発展とそれら個別の学寮が高等教育機関として統廃合され、ソルボンヌ学寮とその他の学寮の建物に集約された過程を整理する。
- ② 19世紀から20世紀にわたる旧パリ大学ソルボンヌ校舎の各改修計画案の詳細を大学組織と都市計画に着目して明らかにする。
- ③ 19世紀から20世紀にわたる各改修計画案における先行形態の扱いに着目して形態学的に記述する。

これら①から③の解明作業によってカルチェラタンのソルボンヌ校舎を中心とした「持続する建築形態群」の特質について論じる。

0-3 研究方法

- ①参考文献、古地図、大学関連施設の図面史料を用いて教会組織を母体とした学寮の分散的発展(1章)、王権の介入によるカルチェラタンのソルボンヌ学寮を中心とした空間的変遷(2章)、旧体制の大学と学寮制度の全廃によるカルチェラタン全体の空間的変遷(3章)を把握する。
- ②ソルボンヌ図書館保存書庫で入手した図面史料と地籍図を用いて当時の社会背景とともに旧パリ大学ソルボンヌ校舎の計画案(4章)と実施案(5章)の空間的特徴をまとめる。
- ③①と②を踏まえたうえで各改修計画案における先行形態の扱いに着目し、建築形態群の変遷を図化する(4章、5章)。

これら①から③の研究手法から対象とした建築形態群の持続的発展の要因を明らかにしたうえで再度カルチェラタン全体の形成過程に焦点をあてて結論を述べる。(結章)

第1章 中世大学の誕生

1-1 古代の高等教育機関

大学誕生以前の古代には中世ヨーロッパに影響を与えた古代ギリシアの高等教育機関やアレクサンドリア図書館をはじめとした巨大な知識継承機関が誕生した。これらは初期の大学と比較して組織と建築は大規模であった。しかし古代都市間のネットワークは乏しく、高等教育機関と知識継承機関の基盤である古代都市の衰退とともに「継承」が途絶えてしまった。

1-2 知的中心地としての修道院

中世ヨーロッパにおいて唯一機能した普遍的統合力としてのカトリックに属する修道院は巨大な領地をもつ封建領主的存在となり、求心性を欠くヨーロッパ社会の唯一の統合された勢力として、強大な力を発揮した。17世紀のベネディクト会修道士マビロンの報告書によると「ベネディクト会の大きな修道院では、まず、図書室が設けられ、次に本を増やすために写本室が設置され、最後に学校が開かれた。学校は聖職者志望の若者だけでなく、学習を希望する近隣のすべての若者に開かれていた」とある。写本室では、図書室所蔵の本を原本として、その図書室にない本を手に入れるために交換用の写本が複製された。修道院は地域の知的中心地としての役割を担い、知的ネットワークの素地を形成していた。修道院の存在は単なる宗教現象としてでなく、社会の重要部分を占める生活様式のひとつであり、学寮建築の最も重要なモデルとなったと考えられる。

1-3 大学の誕生と伝播

11世紀以降、ヨーロッパでは広域的な経済の拠点として、都市が発達した。人の往来と物流の活発化に伴って、アリストテレスなどの哲学書やイスラム科学などの書物がラテン語に翻訳され、古典古代を再発見した「12世紀ルネサンス」と呼ばれる時代に都市でそれらの学問を学ぶために結成された組合組織（図1）が大学の起源である。

正式な記録では1158年に神聖ローマ帝国皇帝の特許状が下され、ボローニャ大学が誕生する。1200年には王から承認され、パリ大学が誕生する。両者の大学を模範としながら、大学制度はヨーロッパにおいて急速に伝播した（図2）。



図1 都市のなかで授業が行われている様子
(Ambrogio Lorenzettiによるフレスコ画「都市における善政の効果」より)
出典：シエナ美術館 <https://www.museisenesi.org/biblioteca/>



図2 1500年以前の大学の分布
出典：C.H. ハスキンス『大学の起源』
(八坂書房、2009、訳：青木瑛三、三浦常司、p10)

1-4 パリ大学の学寮

ノートルダム大聖堂付属神学校の教師アベラールの貢献で神学の研究が名声を博し、パリに托鉢僧と学生が集まった。その教育の質の高さと精神性の革新性が認められて、多くの修道会がパリに学寮を創設した（図3）。このような修道院と正規聖職者の学

寮 (collège régulier) が増加するなかで1257年、ルイ9世の支援を受けて、宮廷司祭であった神学者のロベール・ド・ソルボン (Robert de Sorbon) が神学部学生のためにソルボンヌ学寮 (Collège de Sorbonne) を設立した。ソルボンヌ学寮は世俗聖職者の学寮 (collèges séculiers) であり、設立の背景には影響力を拡大し続ける正規聖職者の学寮に対抗する意図があった。その意図は敷地選定に現れており、勢力を誇ったコルデリア (Cordeliers) とジャコバン (Jacobins) の両者をつなぐ、ラ・アルブ通りの中心に位置する土地を購入し、設立された（図3）。

ソルボンヌ学寮では夜に行われる論争が評判となり、多くの外部の聴衆を集めた。13世紀後半、ソルボンヌ学寮は図書館を創設し、それらを学問を志すもの全員にひらいた。最初の王立の学寮であるナバラ学寮 (collège de Navarre) も図書館を外部の学生にひらき、他の学寮の学生との交流を推進した。両者の学寮は外部の学生に対してに自らの知的財産を共有することで、学生の議論が活発化し他の学寮の模範となった。その結果として、様々な起源から発展した学寮と修道院付属学校の複雑な集合体であったパリ大学において中心的役割を担っていったと推察できる。

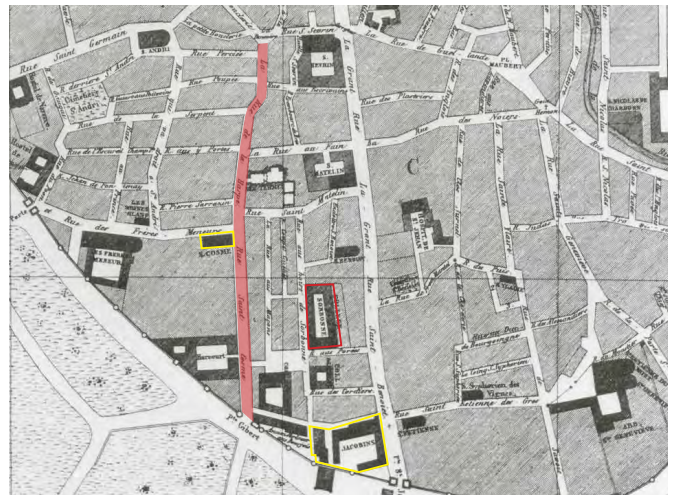


図3 1255年から1314年頃の学寮の分布
(BNF フランス国立図書館より筆者編集)

第2章 中世大学の変遷

2-1 王権とパリ大学の変遷

14世紀後半、ペスト蔓延によってパリの人口は大きく減少した。またパリにおける政治的動乱と百年戦争のパリ侵攻による略奪の影響を受けて学寮の増加は一時的に緩やかになった。パリ大学は百年戦争末期にヴァロワ朝の敵であるブルゴーニュ派を支持したことでフランソワ1世の治世下の王権勢力の拡大にもなって特権と自治権が次第に制限されていった。さらにフランソワ1世はパリ大学への対抗機関として人文主義を学問の中心とする王立教授団 (Collège Royal) を設立した。王立教授団の授業は一般教養を身につけようとする王侯貴族やブルジョワジーなどにも開放されたため、教育は世俗化され、自由な学問の研究機関として啓蒙的な役割を果たした。さらには、カルチェラタンの公用語であったラテン語に代わってフランス語を法律と政府の公用語とすることを宣言した。

ルイ13世治世下においてはソルボンヌ学寮の大規模な建替えと、それと連動した大学周辺の都市整備がおこなわれた。1763年にイエズス会とパリ大学の対立後、学寮は再編成され、28校がリセ・

ルイ・ル・グラン (Lycée Louis le Grand) に統合された。そして向かい側にはスフロ (Jacques Germain Soufflot) によって法学部の校舎がパンテオン建設にともなう都市計画とあわせて計画された。

このように大学が世俗公権力の秩序に組み込まれたことで個別発散的に建設されていた大学関連施設を王権が指名する建築家が都市計画と統合的に計画した。その結果、大学の建築は公共性を帯び、建築形態群としての一定の形式を示すようになったと推察できる。

2-2 王立コレージュ (Collège de France)

王立教授団が発展して王立コレージュ (Collège de France) となった。王立コレージュは建物を所有していなかったが、宗教戦争が終わり、アンリ 4 世治世下になると、土地を購入してもともとあった学寮を取り壊し、クロード・シャスティヨン (Claude Chastillon) による校舎を建設する構想が浮上した。

当初の計画案では長辺 30toises (約 60 メートル) 短辺 20toises (約 40 メートル) の建物のなかの角には 4 つの大講堂と荘厳な王室図書館が計画された (図 4)。

アンリ 4 世の死後もルイ 13 世によって計画は引き継がれ、工事は当初の計画通りに進められたが、資金不足のため、1639 年に旧トレギエ学寮 (Collège de Tréguier) の場所にある翼棟のみ完成し、カンブリア学寮 (Collège de Cambrai) はそのまま残された (図 5)。

1778 年にはルイ 15 世の王室建築家ジャン・フランソワ・シャルグラン (Jean François Thérèse Chalgrin) の設計で新たに 2 つの翼が追加され、大講義室が作られた。その後のルタルイ (Letarouilly) による増築計画図 (図 6) の既存部分からはシャルグランがアンリ 4 世治世下で計画されたものを踏襲していたことがわかる。最終的には 1927 年に現在の状態へと改修された。

今までの学寮と比較すると、平面計画において、知識の伝達に特化した空間が宗教的な生活のための空間よりも優先され、住居の数は減少した。また修道院のように閉じられた中庭を構成するのではなく、建物前の大通りに面した玄関前に公共スペースが確保されていることから、学問を学ぶ場としてのまともさは踏襲しつつも、閉鎖的な学寮の空間から宮殿を意識したシンメトリーな構成に発展を遂げていることが伺える (図 7)。

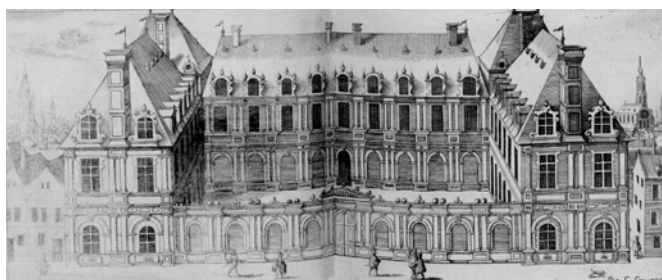


図 4 王立コレージュの計画ドローイング (1612 年)
出典: Tiré de la Topographie française ouprésents



図 5 18 世紀頃の王立コレージュとカンブリア学寮
出典: BNF フランス国立図書館
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/より筆者編集>

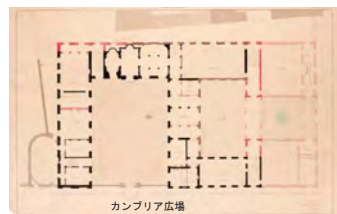


図 6 ルタルイによる増築計画平面図 (1834 年)
出典: コレージュ・ド・フランスオンラインアーカイブ
<https://archibibscdf.hypotheses.org/7550より筆者編集>

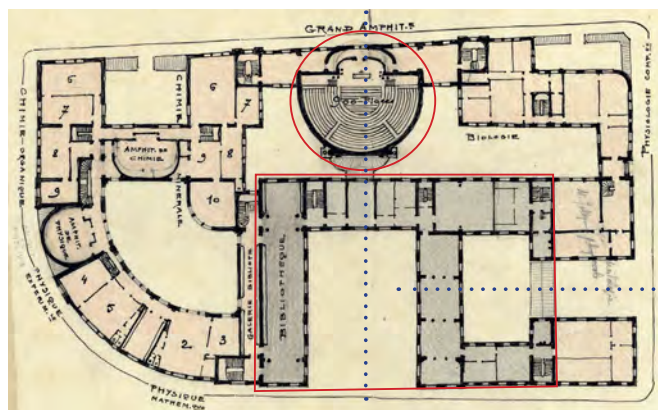


図 7 20 世紀初頭頃の平面図 (ギルバートによる復元)
出典: コレージュ・ド・フランスオンラインアーカイブ
<https://archibibscdf.hypotheses.org/5850より筆者編集>

2-3 ソルボンヌ学寮の拡張

1625 年から 1629 年にかけて、ソルボンヌ学寮はルイ 13 世の宰相で中央集権化に努めたりシュリユー枢機卿 (Armand-Jean du Plessis de Richelieu) の指示でルメルシエ設計のもと、建替えられた。パリ大学の本館としての役割を想定して、図書の集約が行われ、図書館が拡張された。そして 1635 年から 1642 年の間にはもともとあったソルボンヌ学寮付属礼拝堂 (図 8) は取り壊され、イタリアンバロック様式の新しい礼拝堂が建設された (図 9)。



図 8 旧パリ大学ソルボンヌ校舎を描いた版画 (1550 年)
出典: BNF フランス国立図書館



図 9 旧パリ大学ソルボンヌ校舎を描いた版画 (1835 年)
出典: BNF フランス国立図書館

当初の計画案では中世の礼拝堂を保存して、ファサードを新築し、後部には大講堂を設けたうえで教会の両脇にソルボンヌ学寮と部分的に保存されたカルヴィ学寮 (collège de Calvi) が再建される予定であった (図 10)。しかし計画は変更されて、ソルボンヌ学寮の図書館の隣に大講堂を配置したことにより、この建物のボリュームの長辺が 15toises (約 30 メートル) から 20toises (約 40 メートル) になった。そしてボリュームの拡張を可能にするために、南側に新しい礼拝堂を建設することが決定された。

この計画変更の背景には 1620 年代前半、ルメルシエがこのプロジェクトに参加したことで、国家の利益を優先し、プロテスタントを一時的に支援して批判を受けたリシュリユー枢機卿がカトリックの聖職者として再び権力を誇示しようとする政治的意図が反映されたと推察できる。

都市計画に着目すると都市景観におけるパリ大学ソルボンヌ校舎の位置づけは明確にされた。リシュリユー枢機卿は、礼拝堂の西側ファサードの延長線上に広場を設けることを望んでいた。1641 年の土地所有者の一部補償に関する特許状では「ソルボンヌ学寮の正面玄関をラ・アルブ通りから見える位置に設置し、そこに新たにソルボンヌ礼拝堂の扉を設置することを希望する」と記載されていることからリシュリユー枢機卿の政治的意図は明らかである。

ソルボンヌ広場はソルボンヌ礼拝堂の門を軸に、長さ 39 メートル

ル、幅11メートルほどの広さでパリ左岸の2大通りの一つであるラ・アルブ通りからソルボンヌ礼拝堂のファサードがよく見えるように設計されている。またラ・アルブ通りとソルボンヌ広場の間の道はリシュリュ通りと名付けられた。こうしてソルボンヌ礼拝堂は中庭とソルボンヌ広場に対する二面に構えが与えられた。加えて、ソルボンヌ通りでは、ソルボンヌ校舎の正面にある外構が、中庭への馬車の進入を容易にするために半月形にデザインされた(図11)。

大学が世俗公権力の秩序に組み込まれたことで王権による「都市改造」を前提とした建築計画がおこなわれた。このような都市を巻き込んだ計画はのちの新ソルボンヌ校舎拡張においても重要な指針となった。

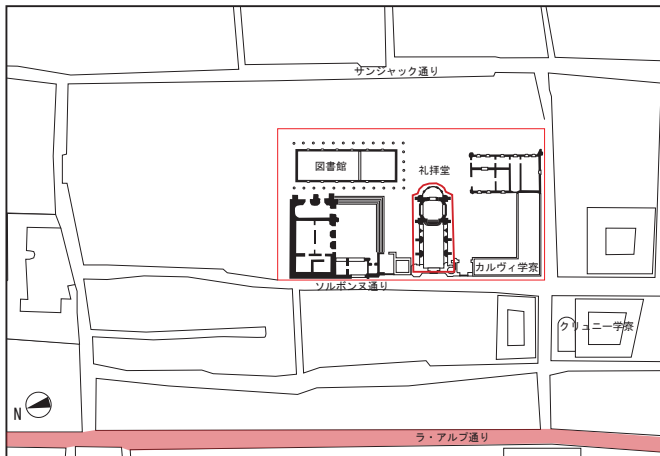


図10 ソルボンヌ学寮平面図(16世紀頃)
出典：ソルボンヌ図書館保存庫で入手した史料より筆者作成

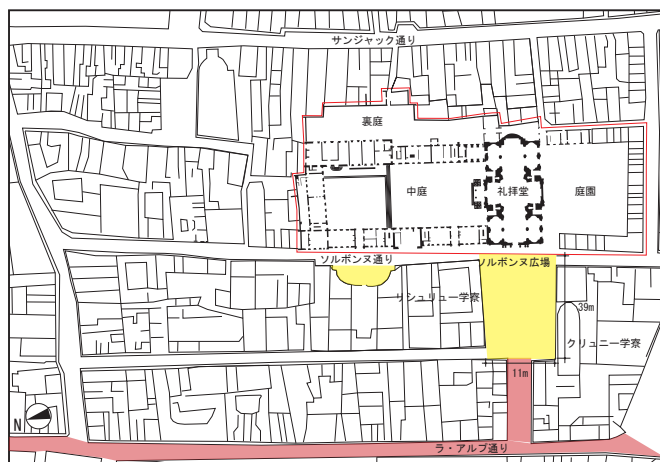


図11 ソルボンヌ学寮平面図(17世紀頃)
出典：Octave Gréard, *Nos adieux à la vieille Sorbonne*, Ulan Press, 2012, p191より筆者作成

第3章 中世大学の解体

3-1 フランス革命後の高等教育機関

フランス革命後のナポレオン・ボナパルト(Napoléon Bonaparte)は第一帝政下で高等教育機関の再編をおこない、旧体制の大学と学寮を廃止した。中央集権体制が強固なものとなったことで国家が運営と教員採用を管理下におき、帝国大学を設立した。

さらにナポレオン3世による第二帝政下では帝国大学の宮殿を壮大な都市計画とともに配置する計画を立案した。帝国大学宮殿はその巨大さや空間の厳格な構成などから帝政の権威を具現化したものと捉えることができる。

これらの大学組織の再編でカルチュラタンのソルボンヌ学寮を

はじめとした大学の建物は増改築され、新たに設立された高等教育機関が収容された。

例えばソルボンヌ学寮とともに神学教育の主要な拠点の1つであった王立のナバラ学寮(Collège de Navarre)にエコール・ポリテクニク(École polytechnique)が収容された。ナバラ学寮の詳細な図面は残されていないが地籍図(図12)からは既存の図書館(図13)と円形大講義室に改築された礼拝堂が読み取れ、その周りの宿舎の建物が増改築され、教室となったことがわかる。



図12 地籍図(1810年)
出典：パリ市立古文書館(筆者編集)



図13 旧ナバラ大学図書館(1860年)
出典：ブラウン大学図書館
<https://library.brown.edu/collections/>

ソルボンヌ学寮の隣のリセ・ルイ・ル・グラン(Lycée Louis le Grand)は1789年のフランス革命後、敷地は占拠されておもに兵舎、政治犯収容所として使用された。ナポレオン・ボナパルトによる第一帝政下の1803年6月10日、パリで最初の「リセ」(=高校)となり、王政復古期と七月王政期には、隣接する家屋を取得し、さらに拡大して1821年までパリ大学の理学部、文学部、神学部の校舎として使用されていた。第二帝政下では高等師範学校の予備学校の校舎が収容されていた。

地籍図(図14、15)からは幾度となく増改築を重ねた複数の学寮が最終的にソルボンヌ学寮の設計者であるルメルシエが手がけたプレシス学寮(Collège du Plessis)の保存されたファサードに面する中庭を軸としてシンメトリに建物が配置され、統合されていく過程を読み取ることができる。



図14 リセ・ルイ・ル・グラン周辺の地籍図(1795年)
出典：パリ市立古文書館(筆者撮影)



図15 リセ・ルイ・ル・グラン周辺の地籍図(1895年~1900年)
出典：パリ市立古文書館(筆者撮影)

また1885年から1893年にかけて、シャルル・ル・クール(Charles Le Coeur)によって実施された再建計画案の鳥瞰図と計画平面略図(図16)からはサンジャック通りに面した左翼部分の旧プレシス学寮と右翼部分の旧クレルモン学寮のファサード部分の両脇に塔を新たに建設することでシンメトリを強調した構えを意図して与えたことが伺える。

フランス革命後の高等教育機関の再編にもなう学寮建築の空間変遷の例としてナバラ学寮とリセ・ルイ・ル・グランをあげた。両者の建物の増改築過程からは経済的な側面が大きいものの、中庭型の学寮建築を先行形態として解釈し、歴史的連続性を意図して創出されてきたことが推察できる。

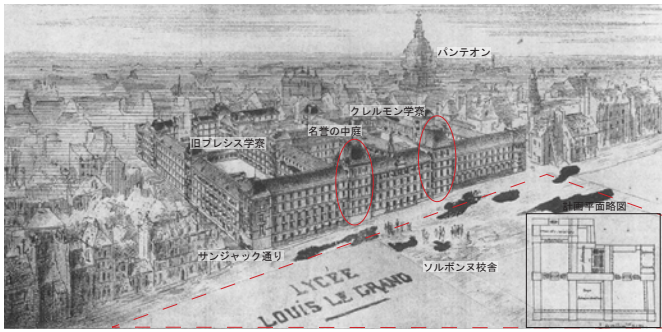


図16 鳥瞰図と平面計画図(1885年)
出典: Marc Le Cœur, *Le lycée Louis-le-Grand à Paris chronique d'une reconstruction différée (1841-1881)*, 1993

3-2 フランス革命後のソルボンヌ学寮

フランス革命後の1791年ソルボンヌ校舎は国有財産となる。その後、旧パリ大学ソルボンヌ礼拝堂が教育者を育成するエコール・ノルマル (École normale) の施設として使用されることとなり、教会の中心には1500席の円形大講堂が計画された(図17)。

この計画の背景として、戦争による予算不足による現実的な問題だけではなく、神学部が使用していた場を、革命後の教育の秩序による世俗的な理性的場として再解釈するという思惑があったと考えられる。この計画はエコール・ノルマルが一年で解散してしまったことで頓挫してしまい、建設現場の瓦礫や資材は数年間放置され、ソルボンヌ礼拝堂は廃墟となった(図18)。

1800年になるとソルボンヌ礼拝堂の現状と対策を考える委員会が発足する。荒廃した状態から修復されて、ドームの下は、あらゆる高等教育機関の表彰をおこなう場として使用された。その後はナポレオンの様々な建築事業のために集められた芸術のための住まいと展示場が計画されたが、市民建築審議会 (bâtiments civils) によって却下された。このようにソルボンヌ校舎と礼拝堂の使用を構想する組織は多く存在し、そのような組織は象徴的なソルボンヌ礼拝堂の神学的秩序の場を使用し、組織の士気を高めることで長きにわたる発展を目論んでいたと推察できる。

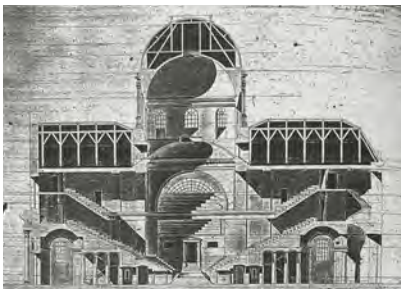


図17 ソルボンヌ礼拝堂改修計画平面図
出典: Christian Hottin, *Les Sorbonne: Figures de l'architecture universitaire à Paris*, Presses de l'Université de Paris Sorbonne, 2015, p62

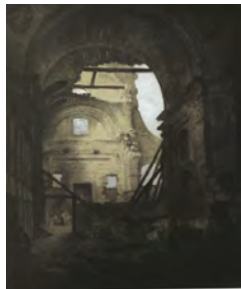


図18 Hubert Robertによる
廃墟となったソルボンヌ(1800)
出典: カルナヴァレ美術館(筆者撮影)

第4章 新ソルボンヌ校舎計画案

4-1 新ソルボンヌ校舎計画案(1805-1820)

1821年、復古王政のルイ18世の王命により、パリ大学は公教育局に割り当てられた。パリ大学は組織が再編されて、旧大学は30年間の中断から再び、教育機能を持つようになった。文学部、科学部、神学部はソルボンヌ校舎に収容された。

ルイ18世は絶対王政時代のパリ大学と王政復古時代のパリ大学を連続したものとして捉えようとした。

1819年の勅令に基づき、パリ大学法学部を収容するために、ア

ントワヌ・ヴォドワイエ (Antoine Vaudoyer) によって礼拝堂が改修された(図19)。礼拝堂内部の両脇には円形の大講堂が建設され、4つの教室が配置された。パンテオンの側に移転していた法学部が、講義に適さないソルボンヌ礼拝堂を拠点と定めたことは大きな意味を持つ。

ルメルシエ設計の旧ソルボンヌ学寮は学生が住むための小さな部屋が多くある学寮であり、以前の大学のように、神学部だけではなく文学部、科学部、が収容されたため、内部を改修して、教室と大講堂を配置することがアントワヌに求められた。1820年の計画案では1階(図20)には実験や研究をおこなう、比較的面積が大きい科学部の教室が配置され、東側には円形の大講堂が計画されていた。2階(図21)には東側に神学部の教室が3つ配置され、執務室、会議室が並んだ。さらに一年後、アントワヌは1階に図書館を計画すると同時に1820年の計画案よりも大規模で東側の庭を敷地とした半円形の大講堂を計画した。(図22、図23)。最終的にはアントワヌによるこの計画はギニエ (M. Guignet) が試行錯誤のうえ、実現した。



図19 礼拝堂計画平面図
出典: Octave Gréard, *Nos aïeux à la vieille Sorbonne*, Hachette, 1893, p205



図20 1階平面計画図(1820年)
出典: ソルボンヌ図書館保存書庫(筆者撮影)



図21 学術部2階平面計画図(1820年)
出典: ソルボンヌ図書館保存書庫(筆者撮影)

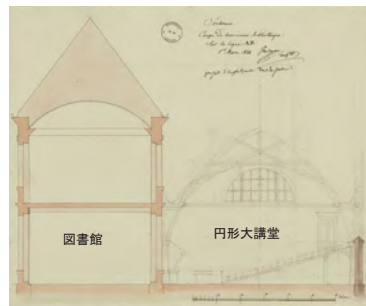


図22 図書館断面計画図と劇場断面計画図(1821年)
出典: ソルボンヌ図書館保存書庫(筆者撮影)



図23 北側中庭平面計画図(1821年)
出典: ソルボンヌ図書館保存書庫(筆者撮影)

学生の増加によってソルボンヌ校舎を増築する要望がさらに高まっていたが、1848年の2月革命の影響で計画は実現しなかった。これらの計画案からは旧来の神学を学ぶ校舎から学問体系の変化によって大学に必要な教室、大講堂が求められたが、敷地面積の都合上、十分に応えられなかったことがわかる。またフランス全土の高等教育機関でも同じように大学建築の刷新がおこなわれた試行錯誤の時代であった。

4-2 新ソルボンヌ校舎計画案(1853-1858)

ナポレオン3世による第二帝政ではアントワヌの息子であり、父から建築を学んだレオン・ヴォドワイエ (Léon Vaudoyer) によってソルボンヌ校舎の増築が計画された。レオンは西側のソルボンヌ通りのファサードを残し、都市改造による影響を受ける北側と東側の建物の建替えを提案した。レオンによって作成された現況図(図24)からは現状の大学周辺の住宅群とオースマンのパリ大改造における、北側のエコール通りと東側のサンジャック通りの道路幅員拡

張の両方が記載されており、レオンによる新ソルボンヌ校舎の計画案はすでにパリ大改造が反映されていたことが読み取れる。

オースマンによるパリ大改造を踏まえて、レオンはソルボンヌ校舎の正門を北側のエコール通りに計画した。北側の大講堂とコンコースを検討した図面が多く残されている。立面計画図（図25）と断面計画図（図26）からは荘厳なファサード、中央の巨大なドームに覆われたホワイエ、前庭の大階段へと続くアーチを縁取る装飾が施された柱など、正門となる北側立面はエコール通りからの景観に重点をおいて、計画されたことが読み取れる。

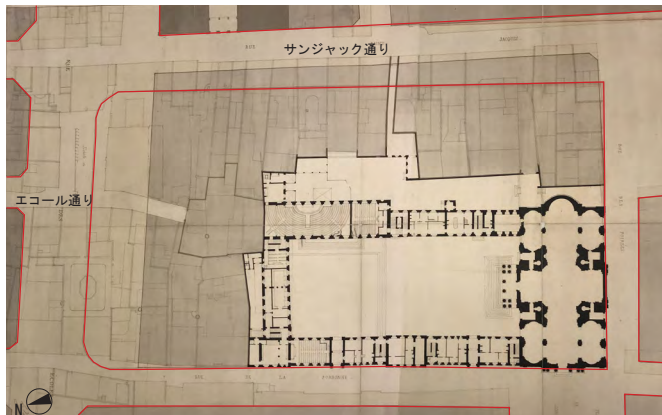


図24 ソルボンヌ校舎現況図(1853年)
出典：ソルボンヌ図書館保存書庫（筆者撮影）より筆者加筆



図25 北側立面計画図(1853年)
出典：ソルボンヌ図書館保存書庫（筆者撮影）

図26 西側断面計画図(上図)と北側断面計画図(下図)(1853年)
出典：ソルボンヌ図書館保存書庫（筆者撮影）

1853年の平面計画図（図27）をみると南側のボワレ通りに神学部は面しており、独自の中庭を持ち、教会と回廊に囲まれた中庭を有している。文学部はソルボンヌ通りの建物と旧校舎の中庭を囲っている。数年後の1858年の平面計画図（図28）をみると建物をさらに南側に延長し、礼拝堂の周囲に大きな空間が確保されていることから、この頃には隣の土地を買収して都市の街路ごと大学の敷地にすることが可能であったと考えられる。

重要なのはソルボンヌ礼拝堂に対しての建物の配置である。全ての平面計画案において旧校舎に手を加えずに、増築する建物は礼拝堂との接地面を最小限に抑えることで礼拝堂の存在を際立たせていることである。また全ての案において2階は先行形態として存在したソルボンヌ学寮以外の増築部分はソルボンヌ礼拝堂に接していないことからその意図が伺える。

本章では七月王政と第二帝政における新ソルボンヌ校舎計画案を取り扱った。当時の都市計画の影響による敷地の前提条件は大きく異なったが、旧校舎、特にソルボンヌ礼拝堂とソルボンヌ通りに面したファサードに手を加えずに、必要な機能の拡張を計画していたことが推察できる。

第三共和制のもとで、レオンの計画案を参照してにネノ（Henri Paul Nénot）の設計による新ソルボンヌ校舎が建設される。レオンの計画案は敷地面積、建設費用などが最終的に建設される新ソルボンヌ校舎に非常に近いかたちで打ち出されていた。

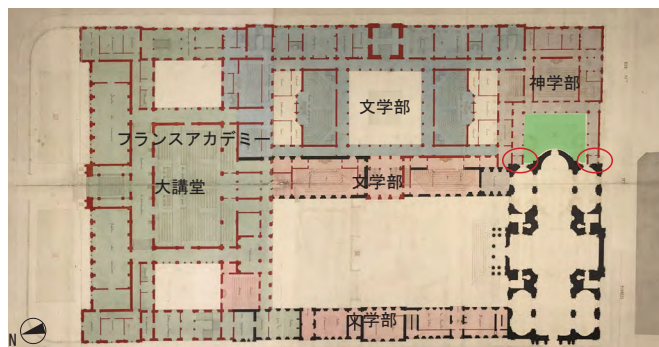


図27 1階計画平面図(1853年)
出典：ソルボンヌ図書館保存書庫（筆者撮影）より筆者編集



図28 1階計画平面図(1858年)
出典：ソルボンヌ図書館保存書庫（筆者撮影）より筆者編集

第5章 新ソルボンヌ校舎実施案

5-1 近代大学へ

第三共和政において普仏戦争の敗北を契機にドイツのフンボルト主義に基づく近代大学として国民国家形成に向けて職業専門性を重視する研究教育の強化が図られた。1885年にパリ大学の神学部が廃止され、翌年の1896年にソルボンヌ校舎でおこなわれたパリ大学の創立総会では大学制度の改革における科学の役割を強調したうえで新制パリ大学が発足する。

5-2 カルチュラタンにおけるパリ大改造による影響

第二帝政期にセーヌ県知事オースマンの指揮のもと、おこなわれたパリ大改造におけるカルチュラタン内の道路幅員拡張や区画の整理によって、大学関連施設とパリ大学ソルボンヌ校舎は大きな影響を受けた。（図29）リセ・セントルイス（Lycée Saint-Louis）はサンミッシェル通りの幅員拡張にともなって、ファサードが5メートル程、セットバックされた。リセ・セントルイスの正面に位置するソルボンヌ広場は拡張がなされて、サンミッシェル通りからソルボンヌ礼拝堂まで見通せるようになった。（図30）パリ改造の際、新ソルボンヌ校舎の拡張は計画段階であったが、新ソルボンヌ校舎建設の際には、隣接するエコール通りとサン・ジャック通りの道路幅員拡張にともなって隣接する建物は超過収用され、校舎の増築がおこなわれた。



図29 1867年までにパリ改造によって整備された道路
出典：パリ市立史料館
<https://bibliotheques-specialisees.paris.fr/ark:/73873/pf0000855889>より筆者加筆



図30 現在のソルボンヌ広場
出典：筆者撮影

5-3 新ソルボンヌ校舎

新ソルボンヌ校舎建設にあたって、教育と研究を一体的に行う場として国民に開くことを目指した。審査委員会によってコンペがおこなわれ、建築家にはルメルシエ設計によるソルボンヌ学寮を科学教育を目的とした近代的な建物と実用的な要求に適合させることを求められた。コンペの結果、設計者はネノに決まった。ネノは都市計画を踏襲した街区拡張とともに論理的で厳粛な啓蒙的性格をもつ新古典主義様式の建築を計画した。

新ソルボンヌ校舎は土地の買収と整備を終えたところから段階的に工事が進められた。工事の過程は大きく3段階に分けることができる。1884年に作成された超過収用計画図(図31)からは1884年の時点で北側の旧ソルボンヌ学寮とエコール通りの間に位置する土地はすでに収用と整備を終えていることがわかる。第1段階ではこの土地に先述のレオンの計画案を踏襲した来客入口、大講堂、文学部、自然科学部を収容する校舎が建設された。第2段階では旧ソルボンヌ校舎の東棟と西棟の取り壊しが始まった。物理学部、化学部を収容する建物が建設された。この際、ジャルソン通りは建物に取り込まれ、現在でも大学外から東西に横断できる通路として使用されている。第3段階では文学部、高等師範学校の2学部、図書館を収容する建物が建設された(図33)。



図31 1884年の超過収用計画図
出典：パリ市立古文書館(筆者撮影)

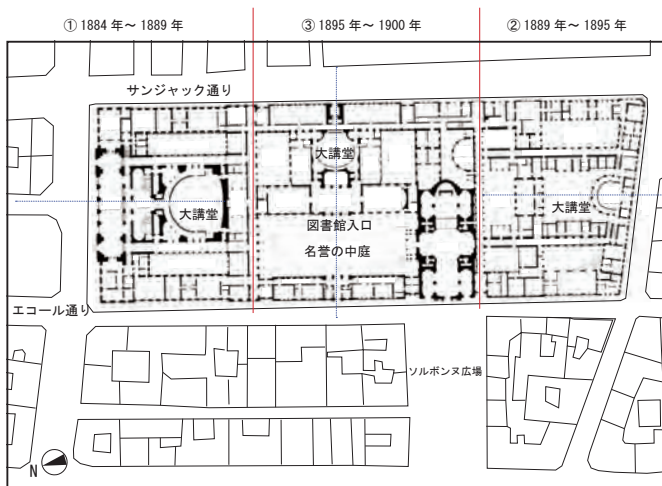


図32 新ソルボンヌ校舎1階平面図
出典：BIS ソルボンヌ図書館保存書庫より筆者作成

図書館に面したファサードに着目すると、建替え前のファサード(図33)は中庭を囲むその他の3面のファサードと一様なデザインであったが、ソルボンヌ通りの入口から見える、新ソルボンヌ校舎の図書館のファサード(図34)だけ偉人の像が立ち並び、出っ張った玄関の下部だけアーチのデザインになっている。平面図をみても

分かるとおり、この「名譽の中庭」という名前の中庭に求心性を持たせている。



図33 建替え前の図書館ファサード
出典：BNF フランス国立図書館アーカイブ

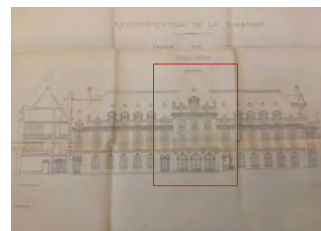


図34 新ソルボンヌ校舎図書館立面図
出典：パリ古文書館(筆者撮影)

ネノの新ソルボンヌ校舎建設では建設時期が3段階に分かれたことによって平面図からは明確に3つのまとまりを確認できる。そのまとまりのひとつひとつは円形の大講堂を軸として、基本的には中庭と教室がシンメトリーに配置されている。ソルボンヌ礼拝堂を設計の定点としながらも3つのシンメトリーなまとまりがひとつの共同体としての大学を形成している。

結算

本研究は教会、王権、国民国家のイデオロギーに連動して形成された建築、都市空間に限定したうえで、その変容を通史的に捉える試みであった。

12世紀以降、パリ左岸における学寮の分散的発展が「大学都市」カルチュラタンを形成した。しだいに王権によって大学の自治権は制限されていき、最終的には大学組織そのものが世俗的公権力の秩序に組み込まれたことで王権主導の大学関連施設の集約がおこなわれた。その際に王権が指名する建築家によって大学の建築は都市計画と統合的に計画されたため、公権力の意図をはらんだ「公共性」を帯びることとなる。

特に設立当初から王権の支援を受けて発展したソルボンヌ学寮は王権の政治的意図が交錯し、周辺の「都市改造」を前提とした計画がおこなわれた。ソルボンヌ学寮の建替えにおいてパリを南北に貫くラ・アルプ通りを軸とした都市計画と統合的に計画され、ソルボンヌ学寮とソルボンヌ礼拝堂自体が都市景観における特別な「モニュメント」として明確に位置づけられた。

19世紀から20世紀にわたる新ソルボンヌ校舎の各改修計画案では大学の運営組織の変化や神学部が廃止された後の大学においても17世紀前半のルメルシエ設計のソルボンヌ学寮を先行形態として踏襲し、ソルボンヌ礼拝堂を設計の定点としながら増改築が計画され、その際には用途および機能の慎重な読み替えがおこなわれた。

ソルボンヌ校舎は3つの建築形態群の集積であると述べたうえでカルチュラタンに広がる大学関連施設の建築形態群に着目すると、修道院をモデルとした中庭型の学寮建築の分散的発散を先行形態(図35)として都市計画と相互に影響しあいながら、それらの学寮建築の吸収と再定義がおこなわれた。また現在でも増改築を経て、高等教育機関として使用されているそれらの学寮建築の変遷を12世紀以降のパリを描いた古地図および18世紀以降の詳細な地籍図(図36、37)によって明らかにした。

以上よりソルボンヌ校舎およびカルチュラタンの大学関連施設の建築形態群は先行形態の慎重な解釈による歴史的連続性が強い意志をもって創出されてきたことによって、持続的発展を遂げたと考えられる。

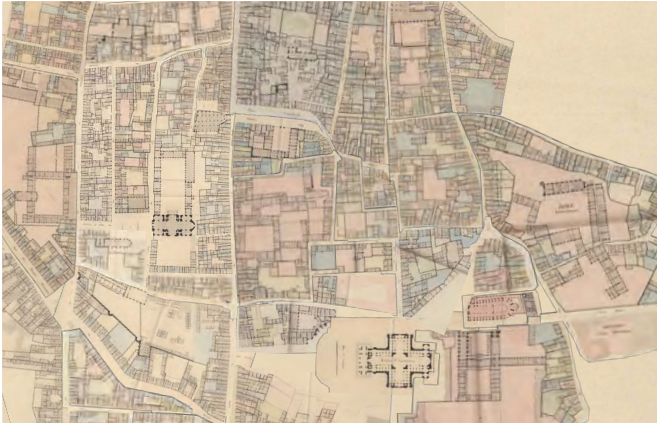


図35 地籍図(1880年~1884年)

出典: パリ市立古文書館(筆者撮影)筆者編集

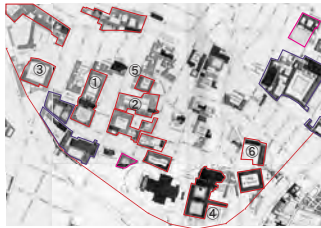


図36 地籍図(1795年)

出典: パリ市立古文書館(筆者撮影)筆者編集



図37 地籍図(1880年~1884年)

出典: パリ市立古文書館(筆者撮影)筆者編集

①パリ＝ソルボンヌ大学 (Université Paris-Sorbonne)

1257年 ソルボンヌ学寮
1642年 パリ大学ソルボンヌ校舎
1905年 新制パリ大学ソルボンヌ校舎

②リセ・ルイ・ル・グラン (Lycée Louis-le-Grand)

1322年 プレシス学寮
1550年 クレルモン学寮
1763年 クレルモン学寮、哲学神学校新校舎、
プレシス学寮、高等師範学校

③サン・ルイ高校 (Lycée Saint Louis)

1280年-1793年 ハーコート学寮
1820年-1823年 カレッジ・ロイヤル・サン・ルイ

④アンリ4世高校

564年 サントジュスビエーブ修道院

⑤コレージュ・ド・フランス (Collège de France)、

トレギエ学寮 (Collège de Tréguier)、カンブリア
学寮 (Collège de Cambrai)
1600年 王立コレージュ

⑥パリ情報大学

1680年 ナバラ学寮
1810年 エコールポリテイク

注

- 1) 岩城和哉 『知の空間 カルチュラタン・クウォードラング・キャンパス』 (丸善株式会社、1998) および岩城和哉 「ケンブリッジ大学カレッジ空間の形態分析 - 空間の持続性と柔軟性に関する考察 -」
- 2) 東京大学工学部建築計画室・建築学科岸田研究室 『大学の空間 ヨーロッパとアメリカの大学 23 例と東京大学本郷キャンパス再開発』 (鹿島出版会、1997)
- 3) Aurélie Perraut, *L'architecture des collèges parisiens au Moyen Age*, Presses de l'Université de Paris Sorbonne, 2009
- 4) Christian Hottin, *Les Sorbonne: Figures de l'architecture universitaire à Paris*, Presses de l'Université de Paris Sorbonne, 2015
- 5) 箕輪成男 『中世ヨーロッパの書物 修道院出版の900年』 (出版ニュース社、2006、pp171)